

## 山本作兵衛と日鉄二瀬禁酒聯盟

横山, 尊  
日本学術振興会 : 特別研究員PD | 福岡大学人文学部

<https://doi.org/10.15017/1932032>

---

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 33, pp.91-112, 2018-03-15. 九州大学附属図書館付  
設記録資料館産業経済資料部門  
バージョン :  
権利関係 :

## 【論説】山本作兵衛と日鉄二瀬禁酒聯盟

横 山 尊

はじめに

本稿は、山本作兵衛と彼が所属した日鉄二瀬禁酒聯盟の関係を詳らかにし、それを通して炭鉱禁酒会のあり方、および禁酒会と会員の関係性を考察するものである。

山本作兵衛（一八九二―一九八四）については、多くを説明する必要はあるまい。福岡県出身の炭鉱労働者、炭鉱記録画家であり、その炭鉱画が日本初のユネスコ記憶遺産（世界の記憶）に登録されたことはあまりに有名である。福岡県を中心とした様々な炭鉱を渡り歩くも、一九二二年一二月から日鉄二瀬出張所稲築坑に入職し、四〇年九月まで在職していた。

『石炭資料 山本作兵衛ノート』と題した史料がある。田川市石炭・歴史博物館が現物保存し、福岡県立図書館に写しがある。一九五二年から六六年の間に作成されたとされる。項目四四が「ヤマの禁酒会」、四五が「ヤマの禁酒会②」、四六が「禁酒大会」、四七が「禁酒歌」と、四八から

五〇が「酒」と、やや禁酒会や禁酒の記述が長く続く。作兵衛は「飲酒家であるが、昭和九年頃一年計り禁酒会にいつていた。それは家計のためであつたが、重働労働者の私には健康上あまり芳しくない」と禁酒会入会とその動機を語っている。作兵衛による禁酒会形成と活動の概略は、例えば次の文に示される。

世が全く不景気になると生活が苦しくなるにつれ、禁酒会などがボツ／＼頭をもたげてくる、昭和九年頃にはヤマでも禁酒会が盛大であった。三井田川坑の如きは特に評判が高く坑の禁酒会幹部が努力して禁酒会会員と飲酒者住宅も別に住まわせていたと言う事であった。そして時々大会を催したり自転車隊を組織して各坑を禁酒宣伝していた。日鉄坑でも其頃各坑で禁酒会ができており時々中央坑の職員会館に大会を催しゼンザイの接待などあった。禁酒に関する御話もあり賑うていた。

一九三四年は作兵衛が日鉄二瀬禁酒聯盟の稲築坑禁酒会に入会した年である。右記の三井田川禁酒会はすでに二三年一二月には発会しており、

二〇年代から隆盛を誇っていた。さらに、二八年は三井三池禁酒会、三二年は住友忠隈禁酒会、日鉄二瀬禁酒聯盟と大規模な炭鋳禁酒会が形成された(表1)。ただし、日鉄二瀬は本論で述べるように、すでに二八年には複数の禁酒団体があった。三井田川などは禁酒社宅を設け、それ以外の炭鋳禁酒会も大会を開催したり、自転車隊による禁酒宣伝などを実施したりしていた。

山本作兵衛ノートの禁酒会に関する記述のハイライトは、一九三四年に福岡市で開催された日本国民禁酒同盟第十五回大会に関するものである。

昭和九年四月八日、桜の花も満開の日曜の晴天で福岡市に於て禁酒大会が開催された。日本国民禁酒同盟、福岡県禁酒聯盟主催、第十回大会。日鉄関係も全員赤タスキ、姓名入りの白リボンをつけ、別に中央坑白色、潤野坑が黄色、高雄一坑が緑、同二坑紫、稻筑坑が樺色の鋳名入りの旗。飯塚駅発八時廿分、同時に住友忠隈坑の会員約三百名も加入し総員六百余名、客車九台に分乗、原田経由臨時列車の事、博多駅着は午前九時四十分下車、列を作って徒歩東公園の武徳殿に向うた。そこが会場であった。(中略)武徳殿の入口には禁酒大会とかを現わした大門が建っており、大会の華やかさを浮き出していた。会場は大口演は始まっており中に入りきれず側に立って人が多かった。総数二千をこえていたらしい。(中略)四月八日武徳殿の大演説会は午后終り二時には全員亀山上皇の銅像前広場に集合写真に映り午后三時より大行進、西公園に向うた。先頭は日足音楽隊、団体先頭は三井田川、アサヒ足袋、門鉄、日鉄二瀬、忠隈、其他二千余の会員は二列縦隊で長蛇の列を作って西公園さして徒歩行進を始めた。中で日鉄二瀬はウチワ太鼓を百名程叩いて足ビョウ

シをとっていた。途中陸軍少将であった江藤深太郎氏は、威風堂々馬に跨り行列を監視、先頭に行ったり後列に廻ったりして調子をあげておられた。行進中は禁酒歌を合唱である。

大会は四月八日から一〇日の三日間の日程で開催された。東公園武徳殿で講演会をし、その後、東公園の亀山上皇像から西公園まで禁酒歌を歌いながら、示威行進をし、作兵衛が所属した日鉄二瀬の禁酒会を含む炭鋳禁酒会が約二千名の動員人数を支えていた。その模様は『福岡日日新聞』、『九州日報』でも連日報道された。<sup>2)</sup>

なお、『九州日報』は、禁酒大会の一週間後に、福岡県醸造協会が主催して、「酒祭り」の実施を企てていると報じた。「最初東公園でコップ一ぱいに威勢をあぶり堂々大デモを行ふ計画であつたが屋外行列に酒気は一切まかりならぬ事になつてをりしらふで行列はといふのでデモは中止となり当日午前十一時から大濠公園で酒祭りの祈願祭だけ行ふ事になつた」という。<sup>3)</sup>ただし、九州帝大医学部教授で精神医学者の下田光造は、一九四〇年に「私の住む福岡市の東公園では毎年春になると禁酒運動の大会が開かれ、それから十日も経たぬうちに今度は飲酒宣伝大会が催されるを恒例として居り、正直者にはどうしてよいか判らぬことになる」と述べている。<sup>4)</sup>恐らく三四年以降にこの光景は常態化していたと思われる。

ところで、日本国民禁酒同盟とはどのような団体だったのか。禁酒運動を宣教師が明治初期に持ち込んで以降、日本でも多数の禁酒会が結成された。一八九八年には約三〇の禁酒団体を糾合し、日本禁酒同盟が結成された。一九一九年に関西の勢力を中心に国民禁酒同盟が分離したものの、翌二〇年に統合し、日本国民禁酒同盟が形成されるに至った。同団体は「禁酒主義団体の聯絡提携を計り、その活動に組織と、統整を与

【表1】戦前における福岡県の炭鉱禁酒会一覧（日鉄二瀬禁酒会関係を除く）

| 禁酒会名          | 事業社        | 場所   | 設立年月     | 中心人物、会員数など   | 特記事項   |
|---------------|------------|------|----------|--|--|
| 海軍第四坑禁酒会      | 海軍省        | 糟屋郡  | [193404] | 第15回日本国民禁酒同盟大会に原田繁雄ら15名参加（『第十五回日本国民禁酒同盟大会』193404、20頁）  |  |
| 大之浦第三坑禁酒会     | 貝島炭鉱株式会社   | 鞍手郡  | 192809   | 会長 浅川春吉、理事 北谷政一、田仲寅吉、松本榮之助、書記 堀川政雄、会員18名（禁日192812、54頁）   | 浅川春吉先づ自発的禁酒断行し、事業の傍ら禁酒宣伝に奔走し、会員18名を得たり（禁日192812、54頁）、「愛鉱禁酒会」（禁日192901、45頁）とも呼んでいた可能性あり。  |
| 蔵内鉱業所禁酒会      | 蔵内鉱業株式会社   | 田川郡  | 192804   | 会長 村本米蔵、会員954名（『全国禁酒団体名簿』192806、56頁）   | 大峯二坑禁酒会が全山禁酒化の試験台、各坑毎の禁酒会組織をめざす（禁新193810、3面）   |
| 大峰一坑禁酒会       | 蔵内鉱業株式会社   | 田川郡  | 193901   | 会長 川添仙松、米田、前田、相原、石井ら幹部諸氏、会員27名（禁新193912、3面）  | 禁酒貯金848円60銭、1939年9月から鉱主が古河鉱業株式会社に変更のため、古河大峰一坑禁酒会に変更（禁新193912、3面）   |
| 早良鉱業所禁酒会      | 早良鉱業株式会社   | 早良郡  | 193907   | 不詳   | 発会式で市川鉱長が訓示、古賀労務主任（親和会長）の激励、九大医学部長大平得三の特別講演（禁日193907、46頁）  |
| 住友忠隈禁酒会       | 住友鉱業株式会社   | 嘉穂郡  | 1932年末   | 発起人 西津富三（支柱夫）、会員43名で発会し1935年5月段階で750名、婦人部70名（禁新193506、3面）  | 1935年5月に西津富三が日本鉱山協会から禁酒功労者として表彰、会の禁酒貯金は1935年段階で4000円（禁新193506、3面）、明神源吉が石炭増産運動における優良労務者として厚生大臣賞（禁日194207、27頁）   |
| 住友忠隈禁酒青年隊     | 住友鉱業株式会社   | 嘉穂郡  | 194210   | 隊員は青年学校在籍生徒170名全員、生徒代表：寺島守（禁日194211、29頁）   | 10月19日同鉱体育館講堂で、小塩次次講師を迎え、結成死期を挙行、校長代理労務主任、駒山貢氏の訓示、小塩講師の「大東亜建設と青年の使命」と題する講演、ドイツフィルム労働奉仕隊の映写（禁日194211、29頁）   |
| 中鶴禁酒会         | 大正鉱業株式会社   | 遠賀郡  | 192912*  | 不詳   | 禁日1929年12月号の「十月号発表以来の新団体」名に記載。遠賀郡中間町中鶴第一坑（45、48頁）。   |
| 大正鉱業所禁酒会      | 大正鉱業株式会社   | 遠賀郡  | 193907   | 会長 吉田哲康、職員50-60名（禁日193907、46頁）   | 中鶴会館で結成、禁酒により体位向上、家庭円満、生活刷新、貯蓄奨励を以て非常時国策に適応せんとするもの（禁日193907、46頁）   |
| 日産遠賀鉱業所禁酒会    | 日産化学工業株式会社 | 遠賀郡  | 193907   | 会員200名（禁日193808、43頁）   | 安全週間に禁酒新聞7月号を全員に配り、福岡県禁酒聯盟理事長大平得三を招聘して後援会を開催した結果、新禁酒会を結成するに到った。（禁日193808、43頁）  |
| 三井田川禁酒会       | 三井鉱山株式会社   | 田川郡  | 192301   | 会長：森田駒吉（労務書記）→1931年から谷川忠也（労務書記）→1940年から佐藤忠市、会員数：3879人（1939年時点）（『田川鉱業所沿革史』、禁日194007、40頁）                                    | 関東大震災後の民心作興の大詔に感奮した森田駒吉ら同士6人の活動から開始。街頭宣伝、示威行列、自転車隊、自動車、飛行機による宣伝ビラ、禁酒新聞等の文書配布、赤ん坊会、講習会、講演会、慰安会、海水浴、観菊会、総会、禁酒貯金の奨励、共愛組合における毎月2回の無酒日、葬儀類の酒禁止、禁酒社宅、1934年から禁酒少年団、大因数316名、1932年に禁酒会婦人部結成、会員2589人、1935年に終身禁酒者普徳団を組織、27名（『田川鉱業所沿革史』） |
| 三井三池鉱業所禁酒会    | 三井鉱山株式会社   | 大牟田市 | 192812   | 会員1485名、会長：深川正夫（鉱夫主任＝人事総括）、8つの禁酒会（宮浦、宮原、万田、四山、三川、亀光、亀谷、横須）の会長は各炭鉱工場の人事取扱の首級者、下川一郎（鉱夫事務所）（禁新192903、3面）                      | 宮浦、宮原、万田、四山、三川、亀光、亀谷、横須の各山禁酒会の集合体。主な事業は禁酒新聞購読、一般的宣伝奨励、講演会談話会、25歳禁酒法運動資金寄付、人帖運動、「酒なし日」の実施宣伝、禁酒柳柳の人気投票（『三池鉱業所沿革史 第七巻 労務課一』、3912頁）  |
| 三井山野鉱業所第一坑禁酒会 | 三井鉱山株式会社   | 嘉穂郡  | 193807   | 顧問 渡邊徳次（労務係長）、会長 西野興九郎（労務係員）、発会時入会者27名（禁日193808、43頁）   | 全国安全週間を契機に結成、発会式の来賓に三井田川禁酒会長の谷川忠也、山野鉱業所庶務課長の中山誠壽が参加（禁日193808、43頁）  |
| 三井山野鉱業所工作坑禁酒会 | 三井鉱山株式会社   | 嘉穂郡  | 193807   | 会員120名（禁日193808、43頁）   | 谷川忠也三井田川禁酒会長の指導の下で結成され、即日発会式を挙行、第二、第三坑にも禁酒機運濃厚で発会の運びに到っている（禁日193808、43頁）   |
| 三菱鯉田禁酒会       | 三井鉱山株式会社   | 飯塚市  | [193401] | 不詳   | 「福岡県禁酒同団体」（禁日193401）に名前記載あるも詳細は不明。   |
| 三菱六坑禁酒会       | 三菱鉱業株式会社   | 鞍手郡  | [193401] | 不詳   | 「福岡県禁酒同団体」（禁日193401）に名前記載あるも詳細は不明。   |
| 三菱七坑禁酒会       | 三菱鉱業株式会社   | 鞍手郡  | [193401] | 不詳   | 「福岡県禁酒同団体」（禁日193401）に名前記載あるも詳細は不明。   |
| 方城鉱業所禁酒会      | 三菱鉱業株式会社   | 田川郡  | 193204*  | 顧問 中西進（労務課長、法学士）、会長 根岸菊男（労務主任）、幹部は労務係員（禁日193206、2面）、会長 藤武貞雄、副会長 久保徳蔵、理事 石井七太郎、幹事 山西武雄、他7名（禁新193509、3面）、会員300名（禁新193206、2面） | 毎月月初めに神前で会員一同禁酒宣誓、1932年4月2日夜、三井田川、田川振興両会の応援で記念講演（禁新193206、2面）、根岸菊男は、朝鮮鉱業所本所勤務に移動（禁新193509、3面）  |

| 禁酒会名           | 事業社          | 場所  | 設立年月     | 中心人物、会員数など   | 特記事項  |
|----------------|--------------|-----|----------|--|---|
| 高田炭坑<br>禁酒会    | 明治鋳業<br>株式会社 | 糟屋郡 | [193401] | 不詳   | 「福岡県禁酒同団体」(禁日193401)に名前記載あるも詳細は不明。                                    |
| 明治鋳業<br>禁酒会    | 明治鋳業<br>株式会社 | 戸畑市 | [193401] | 不詳   | 「福岡県禁酒同団体」(禁日193401)に名前記載あるも詳細は不明。                                    |
| 赤池鋳業所<br>禁酒会   | 明治鋳業<br>株式会社 | 田川郡 | 192705   | 会長、犬伏林十郎、1929年12月から森川重雄、会員200名(『全国禁酒同団体名簿』192806、56頁)                                  | 1929年に犬伏林十郎氏本社に転勤のため会長辞任(禁日192912、57頁)                                |
| 明治第一坑<br>成人禁酒会 | 明治鋳業<br>株式会社 | 嘉穂郡 | 192912*  | 宗岡善松   | 禁日1929年12月号の「十月号発表以来の新団体」名に記載(45、49頁)。                                |
| 久原炭坑<br>禁酒会    | 明治鋳業<br>株式会社 | 糟屋郡 | 193002   | 代表者 北川半助(禁新193003、2面)  | 1930年2月23日に発会式(禁新193003、2面)   |
| 豊国炭坑<br>禁酒会    | 明治鋳業<br>株式会社 | 田川郡 | 193204   | 会長 大野一臣(労務係長)(禁日193206、2面)   | 違法週間に三井田川禁酒会長 谷川忠也、田川振興会長 斉藤西門らが乗り込み果敢な路傍演説を行った反響で誕生(禁日193206、2面)     |
| 赤池炭鋳<br>禁酒同盟   | 明治鋳業<br>株式会社 | 田川郡 | 194302*  | 会長 的野虎雄、副会長 今田一郎、青木留吉、幹事 加藤好市、大沢米吉、辻田音松、桑原政市(禁新194309、2面)、後援 公莊(所長)、会員25名(禁新194302、3面) | 印刷物『酒は飲んで何故悪いか』を、隣組長を経て三千余人の従業員に配り、酒害に関する啓蒙活動、会員獲得に務めている(禁新194302、3面) |

1. 「福岡県禁酒同団体」『禁酒之日本』170号(1934年1月、30頁)に登場したものを軸に、『禁酒之日本』、『禁酒新聞』、『全国禁酒同団体名簿』(日本国民禁酒同盟、1928年、日本禁酒同盟資料館旧蔵)の情報で補った。ただし、三井田川禁酒会の情報は『田川鋳業所沿革史』、三井三池鋳業所禁酒会の情報は『三池鋳業所沿革史 第七卷 労務課一』(ともに三井文庫所蔵)で補った。
2. 設立年月の〔〕は設立年不明だが、〔〕内の年月には存在したことを示す。\*は厳密な設立年は特定できないものの、新設団体を報じた媒体の刊行年月から推定できる年代を意味する。
3. 表中の出典について、『禁酒新聞』は「禁新」、『禁酒之日本』は「禁日」と略し、刊行年月とともに( )内に記す。

へて禁酒運動の促進大成を期し、以て我が国を無酒国たらしめる」ことを掲げ、二二年制定の未成年者飲酒禁止法の禁酒年限を二五歳に引き上げる二五歳未満者飲酒禁止法の成立、アルコール中毒の廃絶などを目標とした。諸地域・職域社会の禁酒会の成立も促進し、全国の禁酒会を糾合する役割を担った。

未だに先行研究で十分に活用されていないが、日本国民禁酒同盟に関しては、日本禁酒同盟資料館が関係史料を多数所蔵しており、二〇一六年に武蔵野大学政治経済研究所に移動された。例えば、各地の図書館を併せても全冊揃わない、月刊雑誌『禁酒之日本』(一九一九?—一九四二)、大分大がごく一部をマイクロで所蔵する以外の所蔵は僅少な『禁酒新聞』(一九二三?)も初期の号を除き大部分を揃えている。それ以外にも児童禁酒雑誌『のぞみの友』、総主事の小塩完次の日記数十冊、同盟関係書類などを所蔵する。その資料の中には、パンフレット『第十五回日本国民禁酒同盟大会 執行順序協議事項事業報告出席者名簿』もあり、出席者名簿一五頁を見れば、山本作兵衛の名前が確認できる。

山本作兵衛が禁酒会に所属したことは、その伝記的記述などで言及されるようになってはいるものの、その禁酒会の詳細は明らかでない。しかし、右記の史料群を駆使すれば、詳細の解明は可能である。当然ながら、作兵衛の伝記的事実のみならず、知られざる炭鋳社会の内実や文化の解明にも寄与するだろう。さらに、本稿は二〇一七年に翻刻が完了した「山本作兵衛——日記・手帳——」も参照する。これも作兵衛の伝記的事実を詳らかにする以上の意味を有する。発展途上とはいえ、禁酒運動の史的研究は複数見受けられる<sup>8)</sup>。その依拠する内容は、禁酒雑誌、新聞記事、運動家の著書などであり、禁酒会側が発信した宣伝、プロバガンダが専

らである。これらさえ史的制約が大きく貴重ではあるものの、偏頗のある情報であることは否定できない。一方、作兵衛は左党で有名な人物である。必ずしも模範的な禁酒会員ではなかったことは誰もが容易に想像できようし、事実そうであった。だとすれば、日記に読む作兵衛の動向は、禁酒会宣伝の裏面にある実態も浮かびあがらせてくれるのではないか。筆者は三井田川を中心とした福岡の炭鉱禁酒会の全体的な動向については別稿を用意しているが、本稿は、右記の見通しをもって、作兵衛と彼が属した日鉄二瀬禁酒聯盟の動向に焦点をあてて分析を行っていく。

### 一、製鉄二瀬禁酒聯盟結成までの動向

山本作兵衛が所属した製鉄二瀬禁酒聯盟が結成されたのは、一九三三年一〇月であった。その後、三四年の日本製鉄株式会社成立後は日鉄二瀬禁酒聯盟と称し、三九年の日鉄鉱業株式会社成立後は、日鉄鉱業二瀬禁酒聯盟と称した。ただし、略称は「日鉄二瀬」が最も流布していた。本節はその発展を炭鉱禁酒会の全体像、前身団体を踏まえ明らかにする。詳細は別稿で扱うが、まず日本国民禁酒同盟の媒体や史料から確認できる炭鉱禁酒会の一覧を挙げる（表1）。これを見れば、場所は筑豊、三池の産炭地ほぼ全域にわたる。また、事業者は、財閥系炭鉱がほとんどである。中央資本は三井、三菱、住友などで、地元資本は安川、貝島などである。設立年月については、一九二三年の三井田川禁酒会の設立を嚆矢とし、二〇年代から三〇年代が主である。中心人物は労務課関係者が目立つ。その事業は、禁酒宣伝、禁酒貯金、体位向上、家庭円満、生活刷新、貯蓄奨励、旗行列、講演、レクリエーション、観菊会などで

あった。これらを踏まえ、製鉄二瀬禁酒聯盟の動向を見よう。

製鉄二瀬禁酒聯盟が成立する以前の一九二〇年代後半から二瀬村では、二瀬禁酒同盟を中心に禁酒運動が展開されていた。本節では、そこから同聯盟が結成されるまでの過程を追う。二六年一月には、江藤平吉という人物を代表に、「二瀬禁酒同盟会」が結成されていた。会員数は五五名、所在地は穂波村製鉄所二瀬出張所であった<sup>10</sup>。江藤の素性はよくわからないが、後に製鉄二瀬禁酒聯盟の理事に名を連ねたところを見ると、製鉄二瀬の炭坑関係者である可能性が高い。二八年一〇月の『禁酒之日本』は九月一日の酒なし日に、「二瀬村禁酒会」が修養団支部、二瀬村青年団、処女会中央支部と連合し、同日、午後七時半より中央坑外明正寺出張所で記念講演会を開いたとある。着席、静座、遙拝、国家合唱に続き青年団中央支部長、二瀬村禁酒会員の田中敏郎が開会の辞を述べ、所感発表では、「同寺縁辺の京大法学生某氏等」が熱弁をふるい、田中が二十五歳禁酒法期成書を朗読し賛成を求め、満場異議なく拍手決定し、禁酒会歌を合唱し閉会したとある。また、田中は蓮台寺小学校における鎮西村青年会主催の震災記念講演会に招聘され、来賓会員約六〇人に対し講演したという。さらに、酒なし日とその前日の八月三〇日、九月一日には、日本国民禁酒同盟からのピラ、ポスター、トラクト、禁酒歌が製鉄二瀬の中央、高雄一坑、高雄二坑、新垣坑、潤野坑に分配された。田中は少年団を召集し、高灯籠、法螺貝を用いた行列をし、各所にピラを配布したという。一方、修養団、禁酒会員も付近の各町村役場でピラ、ポスターを作り、坑内にポスターを張り、坑外各所まで及んだという<sup>11</sup>。なお、二瀬禁酒同盟主催で、青年団、修養団の協同による酒なし日運動は翌二九年も行われ、ピラ、ポスター宣伝、新聞の利用も徹底的で、二一

三の酒屋が自発的に当日は休業したという。<sup>12)</sup>

これらから、日鉄二瀬禁酒聯盟が一九三二年に結成される以前から、二瀬禁酒同盟を中心に、二瀬村の青年団、少年団、処女会が組織的に、九月一日の酒なし日を中心に、日本国民禁酒同盟の支援も受けつつ、熱心に禁酒運動をしていた様子が窺える。

一九二九年は、製鉄所二瀬出張所内に禁酒を標榜する団体が結成された。七月の『禁酒之日本』には、製鉄所二瀬出張所青年団、女子青年団が創立され、両団とも「絶対禁酒禁煙主義を標榜」したとある。<sup>13)</sup> 同年九月一日の酒なし日には、二瀬禁酒同盟の高雄第二坑支部が発会し、午後は日曜学校生徒で「少年禁酒軍」が組織され、共に「旗行列」をし、夜は桃山明正寺、高雄二坑支部の二ヶ所で、記念講演会を開き、白山雲龍、江藤幾之助、入江俊吉郎が熱弁を振るった。<sup>14)</sup> 同支部の代表は入江だった。<sup>15)</sup> 日曜学校とは、慈光日曜学校といい、高雄第二支部が経営したもので、三〇年七月六日に一周年記念会を開いたというが、それ以上の詳細は分からない。<sup>16)</sup> もとより二瀬禁酒同盟会は製鉄所出張所内に所在しており、村の青年団、処女会などと製鉄所出張所内のそれらは会員も重なっていた可能性が高い。ただし、出張所や坑名を冠した団体が形成されたのは、二九年からだった。

なお、一九三二年四月二九日の天長節に、三井田川禁酒会の自転車隊が嘉穂、鞍手、田川の三郡をめぐり、その際、飯塚市市制祝賀産業博覧会見学と製鉄所二瀬禁酒会訪問をした。同隊は、二瀬禁酒会の自転車隊に出迎えられ、一〇時半に博覧会見学と宣伝をし、〇時半に製鉄所二瀬出張所佐岐須坑に着き、二瀬禁酒会の歓迎会を受け昼食を取、一時から宣伝隊を五班に分け、同坑労働者住宅内に路傍宣伝を行い、さらに中央

坑に到着し八か所で路傍宣伝をし、午後四時に同所本部に集合し、二瀬禁酒会長の大森辰二——いつ会長交代があったかは不明——の挨拶、三井田川会長答辞を述べ、二瀬および三井田川両禁酒会の万歳三唱の掛け声をしたのち、田川の自転車隊は午後六時に帰着したという。<sup>17)</sup> 三井田川禁酒会は、二三年の結成以来、婦人部まで含めれば最盛期は約六千人と、全国の産業禁酒会の中でも随一の会員数を誇り、福岡県の炭鉱禁酒会を牽引する存在で、周辺の炭鉱の禁酒会結成を促す活動などもした。この事例は、筑豊地域の炭鉱禁酒会同士の協力や交流を示す好例である。<sup>18)</sup>

製鉄二瀬禁酒聯盟結成は一九三三年一〇月二三日だった。『禁酒新聞』は「製鉄二瀬出張所管内五ツの炭鉱のそれ〴〵に設立中であつた禁酒会はいよ〴〵各坑に出来上つた」と報じた。五つの加盟団体は、潤野坑禁酒会（一一人）、高雄二坑（二八八人）、高雄一坑（六五人）、中央坑（六四人）、稲築坑（二六名）であり、発足時は計五四九名だった。高雄二坑の禁酒会はずでに二九年九月に結成されており、人数も最多である。また、一坑の発会式は三二年六月だった。それ以外のものがいつ形成されたかは不明である（表2）。三三年一〇月の聯盟結成間際だった可能性が高い。関連団体に入江俊吉郎、江藤兵吉らの指導になる少年禁酒団もあった。「理想的無酒炭坑の出現と努力するを以て目的」とした同聯盟の規約の第一条は「本聯盟は製鉄所二瀬禁酒聯盟と称し事務所と労務課福利係内に置く」とあり、『禁酒新聞』も「労務課が乗りだしてやつてゐる事業」であることを強調している。

当日選挙された役員は、理事長…（労務課長）吉田友輔、理事…大森辰二、江藤兵吉、幹事…青柳梅次郎、岩佐春吉、入江俊吉郎、成清三郎、木崎一恵、岡本秀一、村瀬高志、中島兵六、樋口晉、合田兼助、高島梅

【表2】日鉄二瀬禁酒聯盟と傘下団体一覧

| 禁酒会名                  | 事業社      | 場所  | 設立年月     | 中心人物、会員数など   | 特記事項   |
|-----------------------|----------|-----|----------|--|--|
| 製鉄所二瀬出張所及青年団<br>女子青年団 | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | 192907*  | 不詳   | 両団とも絶対禁酒禁煙主義を標榜（禁日192907、54-55頁）   |
| 高雄二坑<br>禁酒会           | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | 192909   | 1933年10月の製鉄二瀬禁酒聯盟結成時に会員は288名（禁新193312、3面）  | 1929年9月1日、慈光日曜学校で発会式、午後には日曜学校生徒で組織された少年禁酒軍と共に旗行列、夜記念講演会、白山雲龍、江藤幾之助、入江俊吉郎ら弁舌（禁日192910、36-37頁）   |
| 製鉄二瀬<br>禁酒聯盟          | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | 193310   | 理事長 吉田友輔（労務課長）、理事 大森辰二（のち理事長）、江藤兵吉、幹事 青柳梅太郎、岩佐春吉、入江俊吉郎、成清三郎、木崎一恵、岡本秀一、村瀬高志、中島兵六、樋口晋、合田兼助、高島梅作、森昇、朝原喜作、1933年10月の結成時に会員は、各炭坑合計で549名（禁新193312、3面） | 二瀬製鉄出張所労務課内、1933年10月23日、潤野坑、高雄二坑、高雄一坑、中央坑、稲築坑の各禁酒会の聯合団体（禁日193312、58-59頁）、1933年10月段階で禁酒貯金1208円47銭（禁新193312、3面）、1939年5月より会社が日鉄鉱業となったので、日鉄鉱業二瀬禁酒聯盟と改名（禁日193907、45頁） |
| 高雄一坑<br>禁酒会           | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | [193310] | 1933年10月の製鉄二瀬禁酒聯盟結成時に会員は65名（禁新193312、3面）   |  |
| 中央坑<br>禁酒会            | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | [193310] | 1933年10月の製鉄二瀬禁酒聯盟結成時に会員は64名（禁新193312、3面）   |  |
| 稲築坑<br>禁酒会            | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | [193310] | 1933年10月の製鉄二瀬禁酒聯盟結成時に会員は26名（禁新193312、3面）   | 山本作兵衛が1934年2月3日に入会。  |
| 潤野坑<br>禁酒会            | 製鉄所二瀬出張所 | 嘉徳郡 | [193310] | 1933年10月の製鉄二瀬禁酒聯盟結成時に会員は116名（禁新193312、3面）、1940年2月時の会長は黒永虎之助（禁新194002、2面）   | 一時、衰運の一路、自滅の状態に陥るも、1939年10月、労務係長濱和平と黒永虎之助が残留会員20余名で改組新発足、潤野坑禁酒会第1回総会を開催、1940年11月段階で会員270余名（禁新194011、4面）  |

注記内容は【表1】に同じ。

作、森昇、朝原喜作だった。同会は労務職員の大森理事の言動が目立ち、吉田理事長の名はあまり見られない。理事長に労務課長を形式的に据えた可能性もある。会員は給料から毎月一〇銭の会費を治める他、一口二〇銭以上の禁酒貯金をするとあり、聯盟結成の三三年一〇月二三日段階ですでに一二〇八円四七銭に達していた。

発会式は高雄二坑の二瀬会館で挙げ、住友忠隈、三井田川からも来援があり、日本国民禁酒同盟から小塩完次同盟主事、松村有志太郎理事（京都帝大医学部教授、医学博士）が臨席し、昼は二坑、夜は潤野坑で記念講演を行った。

同会は日本製鉄株式会社設立後の一九三四年は、日鉄二瀬禁酒聯盟と改称した。以降も酒なし日には積極的な活動を展開し、例えば、三五年の酒なし日九月一日前後には中央禁酒会の「中堅闘志は背に『禁酒』と染めぬいた日の丸の揃ひの印袷天に会旗を押し立て、午前七時、在郷軍人会、男女青年団、少年少女団、主婦会等の各種教化団体と共に中央山神社前に参集、厳かに震災追悼記念式を挙行、式後数流の長旗を推したて、坑内社宅街に行進、数ヶ所に於て熱心なる路傍宣伝を行った」とある。類似の行司は高雄一坑、高雄二坑、潤野坑、稲築坑の各禁酒会も行い、高雄一坑では標語、川柳、ポスター等の展覧会を従業員会館で催すと共に、講師を招いて記念講演会を開催したという<sup>⑩</sup>。

さらに一九三六年頃から日鉄二瀬禁酒聯盟は会員倍加運動を展開している。三六年八月二六日の幹部会で「各坑とも許す限りの方法を以て酒なし日を宣伝すること」に加え、「記念事業として倍加運動に邁進すること」を決議した。ピラ、ポスター、戸別訪問で会員の獲得に努めた様子が窺える<sup>⑪</sup>。すでに同年三月に大森辰二は、聯盟の主な事業として、「一人



が一人を」をスローガンにした会員倍加運動を行っていることを伝えている。三六年三月時点では、同聯盟は会員数八七〇名に加えて、少年禁酒団、婦人部を有する大所帯になっており、主婦会と提携した婦人部の強化運動、職員部会の結成も行っているとしている。<sup>21)</sup>

加えて、日鉄二瀬禁酒聯盟は、安全運動にも積極的に関わった。名古屋で一九三五年一〇月二日に開催された、全国工場鉦山安全週間運動の全国大会で、「昭和十一年七月舉行さるべき第九回全国安全週間には断然禁酒主義を採用し、ビラやポスターに禁酒を明示して宣伝するはもとより禁酒デーの設定から進んで週間全体を禁酒週間たらしむべしとの提案が圧倒的支持を獲得」した。安全週間運動中央委員、五十嵐健治（白洋舎社長）の提案だった。<sup>22)</sup> 大森辰二は五十嵐と気脈を通じていたらしく、「『安全週間禁酒』の決議は、五十嵐氏からいち早く御通知いたゞき、同志と共に双手をあげて万歳を叫んだ」とし、実施に当たって「一層細心なる注意と精巧なる戦術とを以て、先づ十分に酒害を教育し、従業員諸君が、心から目ざめ『安全運動』のために喜んで禁酒を守り得る迄にしたい」と述べた。<sup>23)</sup>

安全運動では、主婦の活動も強調された。一九二八年の鉦山労役扶助規則改正で女子坑内夫の使用が禁じられ三〇年代から実施された影響で、かつての女性労働者は主婦化した。その諸活動が日鉄二瀬でも窺える。例えば、高雄第二坑禁酒会は「明るき禁酒家庭の建設は、先づ主婦の奮起にあり……と、本会婦人部は、酒より愛児を、夫を守るための苦闘を続け」、三五年六月二三日の潤野坑禁酒会三周年記念会では、高雄坑婦人部から一〇名が参加し、西春枝が「火を吐く如き母性愛の感話」をなした、さらに「愛国米献納」「酒害教育の為めの母子座談会、或は遠足、見

学等、忙中閑を活用」した活動をしている、と報告した。<sup>24)</sup> 主婦の家庭内外の広範囲な活動が炭坑禁酒化に寄与しうる事が強調されている。

かかる思考の延長上で、『禁酒新聞』は日鉄二瀬の安全運動における家庭や主婦に関する記事を複数掲載した。例えば、二瀬鉦業部の中川達太郎は、炭鉦の主婦はどこでも「家庭における一寸した心の足らなかつた事が何時も病氣や怪我の原因となつてゐる」と話すとし、それを防ぐのが「安全運動の目的」で、「健康に働いてこそ家庭はいつも明らかに益々仕事は愉快に能率もだん／＼向上」し「護国の産業の為に御奉公」できると述べた。<sup>25)</sup> また日鉄二瀬開催の安全座談会も掲載され、山神社への黙祷、病氣見舞い、清潔日の様子を伝えた潤野坑の川口シマ、「主婦会の一銭貯金」に言及した稲築坑の後藤イチの発言が紹介された。後藤は「婦人は仕事に、女は家庭の心配事を自分一人で引き受け、主人には仕事だけに全力を尽していたゞく、これが安全運動の一つであり又、天皇陛下様にお忠義である」とも発言した。<sup>26)</sup> 『禁酒新聞』がこれらを掲載した意図は、家庭内禁酒こそが病氣や怪我の予防や家庭内平和、ひいては能率向上、産業報国に寄与することを強調するためであることは明白である。

一九三〇年代半ば以降、日鉄二瀬禁酒聯盟は三井田川に次ぐ筑豊禁酒会の雄といふべき存在になった。『禁酒新聞』が掲載した「禁酒新聞購読部数番付」の三五年一月のものを例にとれば、日鉄二瀬聯盟は、婦人矯風会（五〇一〇部）、三井田川（四〇〇〇部）、大阪（一七〇〇部）に次ぐ一二〇〇部を購読し、西方の関脇と位置づけられた。<sup>27)</sup> これは会員数と組織力のバロメーターと見なせる。日鉄二瀬禁酒聯盟は、福岡県の禁酒会では三井田川に次ぐ存在となり、全国的規模の禁酒会になっていったことが窺える。

## 二、山本作兵衛日記に読む禁酒会入会と「禁酒」実践

前節で扱った日鉄二瀬禁酒聯盟の動向を踏まえ、本節は山本作兵衛の入会と、成功したとは言い難い禁酒実践について論じる。ここで用いるのは、ユネスコ「世界の記憶」(世界記憶遺産)に登録された福岡県立大学保管の日記を解説した資料集(二〇一七年に完結)である。予め述べれば、作兵衛の禁酒会での活動が見いだせるのは、おおよそ一九三四年から三六年までであるため、主に同資料集の第一〇巻に依拠する<sup>(28)</sup>。

作兵衛は日記で禁酒会のことを一九三三年二月二四日に書いていた。「クラブに禁酒講演及活動ある由」と短く書き留めつつ、その日は飲酒しづらい。作兵衛が禁酒会に入会したのは、三四年二月三日である。「禁酒会員になる、松元松太郎氏は前に 大野茂、坂井豊と三人」、「住友生命、保険に加入(禁酒をして)の事 労務白井氏にたのみ、禁酒会員に加入、一挙両得、子供のため」とある。二月三日の日記補遺(四五)も「数年 否、一生、禁酒の積もり、禁酒に因りて、保険の金を納める事」と動機を窺わせている。

二月三日の末尾には「最後の(有)」とある。作兵衛日記の毎日の記述の末尾には「監有」、「耐有」ないしは「有」などの文言が頻出する。これは熱爛、焼酎、さらに飲酒全般が有ったことを指すと思われる。禁酒会入会前日の二月二日は、「廿一日の酒をのます可く我も一升買ふ」とあり、末尾は「監大有」とある。二月三日を以て作兵衛は禁酒を決意した。翌二月四日は「禁酒第一日」とあり、二月五日には「禁酒の第二日」と休業日の定酒半リットルも、廃止するなり」とある。二月四日以降、無酒を意味すると思われる「(ム)」の文字が日記の末尾に続く。二月七

日の日記補遺(四七)は、禁酒実践時の気分をこう記した。

(禁酒会に入会せし事とて、心をきなく、大工の手伝いがされるのは実に痛快である、何故なれば道具洗の酒に關係がないから

また、昼飯にせよ、精進上げにせよ、酒に無關係なれば従来の如く、他人より飯之、たさ、人物と、注視されざるが 実にく飲酒酩酊せしより痛快であつた、

(禁酒会初めての吊儀に最適の時であつた、

僅か一杯は よき様なれ共、其の僅いっぱいは、禁酒を破る、原動となるものなり、とのかく、始めて禁酒会に加入して、何だか、飲酒時代より、気が、陽気である

この禁酒数日後の記述から窺うに、作兵衛は、一切、酒を口にしない、言わば絶対禁酒を志したらしい。炭鉱生活における禁酒の利点を種々挙げるが、これは禁酒会の教えを内面化しようと自身に言い聞かせているようでもある。また、作兵衛日記一九三三年から三四年の記述は、「昭和七八九年」と一冊である。その日付の記載のない日記の冒頭箇所には、「禁酒訓の一」と題した、次の記載がある。

(酒神の人を殺す事軍神より多し／(凡ての悪徳の中、人をして最も粗暴ならしむるものは飲酒なり／(酒内に入れば、智外に出づ／(やけ酒は貧乏の花盛り／(論より証據、現に酒飲みの子に優れたる人少なし／(酒といふ氣違水に浮されて家から田地流れし人あり／(百葉の長とはいへど千萬の病ぞ酒よりこそ起れ／(酒飲んで遊び暮したそのかはり今は食はずにかけまわるなり／(一杯人酒を飲み 二杯酒酒をのみ、三杯酒人をのむ)／は改行を意味。)

この禁酒訓の文言の作者や作成時期は明示されてはいないが、作兵衛

が自身のみで思いついた内容とは考えにくい。内容は日本国民禁酒同盟のメディアなどで頻繁に説かれた内容である点に鑑みれば、日記内のこの文言は禁酒会で説かれた内容を作兵衛が自身の誠めのために、日記冒頭の目立つ部分に記したものと史料される。

一九三四年二月二三日は、「昨年今日酒の失敗 今は禁酒党なれば安全」とある。実は、前年三三年二月二三日の日記に「末吉好時宅に泊るとけいを迷わす 大酔して居た ため」とあり、末尾に「内外大有」とある。同二五日は「末吉君にはがき出す。時計の事共、又大酔の御詫びに」、二七日に、「午三時頃（末吉好時）赤坂〔坑〕より愈々」時計を持参して。くれる、実に極度の失敗」とある。作兵衛は二月二三日に泥酔し、末吉好時の家に時計を置き忘れ、翌々日に詫状を出し、その翌々日に末吉が赤坂炭鉱からわざわざ作兵衛に時計を届けに来た。反省した作兵衛は一年後も忘れず、禁酒の志を強くした様子が窺える。

一九三四年二月二三日には「禁酒会員の徽章を労務課より買ふ（十銭）」とある。禁酒会の実務を労務課が担っている様子が窺える。三四年三月二日には「禁酒新聞始めて来る」とあり、三月四日は、「更生館に禁酒会例会」「禁酒歌二回合唱」「全員の半数以下十五名集る、（）安村、白井四月八日に福岡で 全国禁酒大会のある話」とある。四月一日は「宵七時より（更生館）に禁酒会集合の事 廿五名」、「われは第二回目の事 大会打合せ」とあり、二日には「来る八日 福岡に禁酒大会にゆく旅費、（金式田を 労務 安村君に渡す）」とある。冒頭に記した第一五回日本国民禁酒同盟大会出席の準備である。思えば、作兵衛の二ヶ月前の入会も、同大会の参加者を増加させたい禁酒会側の意向もあったのかもしれない。

一九三四年四月八日の日曜日は「第十五回禁酒大会に参加 福岡」と

ある。同日の記述は補遺までである。冒頭の山本作兵衛ノートの記述は日記と補遺に基づくと見て間違あるまい。日本国民禁酒同盟の媒体も盛況ぶりをこう述べた。「午前九時十五分博多着の特別列車で乗り込んだ三井田川の七百余名を先登に、日鉄二瀬と住友忠限の混成団の八百名、三池からの五百名等々の部隊が、それ〴〵別仕立の貸切電車で乗り込み、駅から会場までを楽隊、旗幟、赤ダスキの武装物々しい隊列を行つて練込むので、会場の四周は忽ちにして人の波歎呼のあらしに埋まり」、二千人は収容できる会場の武徳殿から溢れ、「場外広場に溢れて固唾を飲む者数知れぬ超満員」と。別の資料は第一五回日本禁酒同盟全国大会の動員人数を二八〇〇人と伝え、二位の松本七七七人（一九三〇年の第一一回大会）に大差をつけた<sup>(30)</sup>。この動員数に大きく寄与したのは三井田川や日鉄二瀬の炭坑禁酒会だったことは明白である。

ただし、会場満員の中、作兵衛は一緒にいた二家族と会場を抜け出し、水族館に出かけた。

我等の組は一番遅いので、満員すし詰の武徳殿には迎ても口演を委しく聞く事叶はず、我 大野、をや子、松元 坂井をや子、途中脱出して、筥崎に徒歩でゆき、水族館を見る、其の前中食は、武徳殿で小松原で喰ふ 水族館より飯途は電車にのる 同附近に 大動物園もあるので入りたいが時間がない

箱崎浜には箱崎水族館があり、一九一〇年三月から三五年四月まで存続した。福岡市動植物園は東公園内にあり、三二年八月から四四年五月まで存続した<sup>(31)</sup>。四月八日の日記中の「二時前に亀山上皇前で写真に移り三時より行進、迎公園にゆく」模様は冒頭の通りである。

その後も一九三五年まで作兵衛は禁酒会の活動に定期的に参加してい

た様子が日記から窺える。『禁酒新聞』や『禁酒之日本』にはない、詳細な動向である。

一九三四年六月三日に「七時すぎより更生館に禁酒例会にゆく、十名計にて少きため 近日集まる事に極め」とあるように、会合にも定期的に顔を出した。九月一日に「禁酒貯金始め五十銭」「禁酒会の貯金始めとして、平松繁松、進真市と三人 帳面来る」、一五日「前九時の休に、労務、(安村) 氏に禁酒会の貯金、三人分一円五十銭持参する」とあるように、禁酒貯金を禁酒会に収めている。また、一月五日は「労務、安村氏より禁酒会資金せい作として、石鹼売を恃まる」とあり妻と売ったとの記述がある。

一九三五年一月二五日は「木森氏禁酒新聞持参さる 平畑のと進真市との分廿五歳禁酒法案の願書も」とあり、日本国民禁酒同盟が毎年行った、未成年者飲酒禁止法の禁酒年限を二五歳に引き上げる法案を求める署名活動にも参加したことがわかる。三月一九日は、「禁酒幹事辞令来」とあり、聯盟内の稲築禁酒会の幹事に就任した模様である。六月九日の「(田辺尚喜) 氏海軍で昨日死 禁酒会の会葬四時の出棺をそくなる五時半すぎ」という記述は、禁酒会が炭坑内で一種の生活組織としても機能したことを示す。六月二三日は、「禁酒会例会来月より毎月実行の由 六時より更生館で禁酒会例会、例になく、本日は約卅人集合する、会員は百〇五名になりし由、倍加運動 貯金奨励の件あり、(約三ヶ月ぶりの集) 樋先、安村、白井、中林、合原氏の口演あり」とあり、発足時二六名の稲築坑の禁酒会員も一〇五名と倍加し、数ヶ月置きの開催だった例会も毎月行い、禁酒会の活性化が窺える。

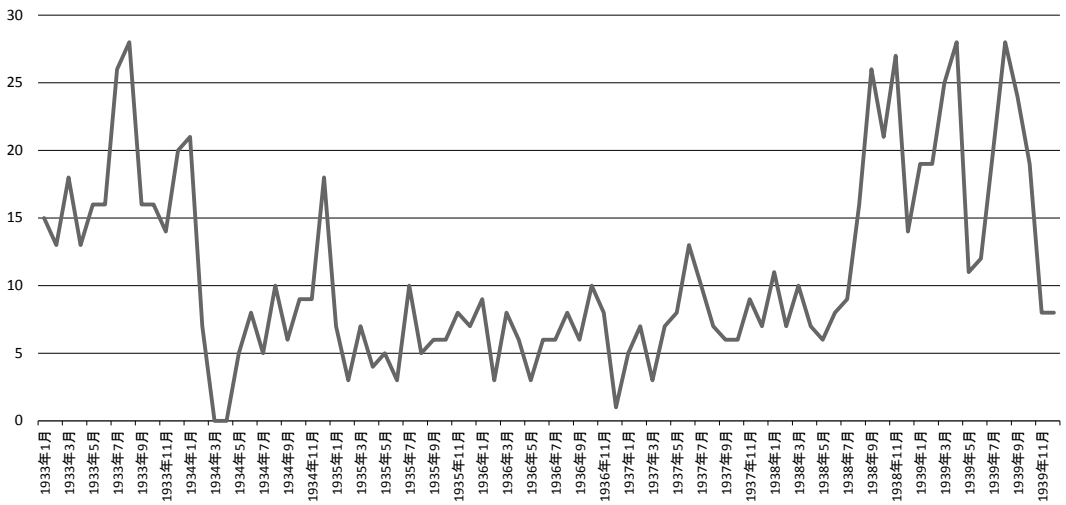
また、後年の作兵衛の炭鉱画家としての活動に鑑みて興味を惹かれる

のは、一九三五年二月三日の記述で、「禁酒会は愛国運動をしてをる 我はゆけず」、「禁酒会のため二月四日より十日まで小安全くろがね着用 のポスターかく」とある。作兵衛は三四年三月から稲築坑の安全班長を務めており、前述の通り、日鉄二瀬禁酒聯盟も早くから安全運動への禁酒の導入に賛成していた。作兵衛はそのためのポスター作成も手掛けたらしい。

こう書けば、作兵衛はいかにも模範的な禁酒会員に見えようが、長続きしなかった。そもそも作兵衛が絶対禁酒を貫いたのは、せいぜい二ヶ月間にすぎない。『グラフ1』は、日記中の飲酒を示す(有)の字や飲酒の記述を、作兵衛が禁酒会に入会する一年前の一九三三年から会員としての活動の痕跡がほぼ完全に窺えなくなる三九年まで数えたものである。<sup>(32)</sup>

禁酒会員になった一九三四年二月の飲酒回数は、七回で、入会した月に数回は飲酒している。三四年二月三日の日記に「最後の(有)」と書くも、二月一三日は「購買より五ベシ酒とる」とあり、同日の日記には(有)が見られ、一四日も「上酒少し、よばれる」やむなく」とあるも、末尾は(有)とある。一七日も「禁酒会委員乍ら 少しよばれて販る」との記述に、日記の末尾(外有)の印がある。二四日は「愛宕神社に参り 平山に廻り、父兄に逢ふ 酒少し飲む」、「禁酒党なれば さけのまづ」とあり、末尾は「兄と(有)」とある。「禁酒党」であることを意識しつつ、若干飲酒したらしい。ただ、三四年三月、四月の日記には無酒を示す(ム)の字が続く。禁酒訓にあるような絶対禁酒を貫こうとした様子が窺える。

ところが、三四年五月三日は、「宵、土師にゆく、兄宅に 丘次郎、全家も来り居た 父も、上山田より、をそく販り来る 酒少し よばれば販



【グラフ1】日記に見る山本作兵衛の飲酒回数の推移（月別）

る」とあり、日記の末尾は「(外有)」である。以後、作兵衛は三十七年二月まで平均月六回は飲酒した。絶対禁酒の方針は早くも破られた。時として深酒に及ぶこともあった。三五年一二月八日は、「大野宅にて忘年会 我大酔 安田吉氏をくられ」とあり、翌九日は「昨晩は特に酔て居た、安田吉五郎氏に送りもらふ数百日振りの大酒はあへて身体に害こそすれ為めにはならぬ。我乍ら愚事ならずや 何たる意志の弱き事

や」とある。しかし、同日も「夕方一合のみ」とある。なお、グラフでは三十四年二月の飲酒回数は一八回と突出しているが、一八日に作兵衛の父が死去し年末と重なったことが影響したのかもしれない。

ただし、絶対禁酒を早くも一九三四年五月に二ヶ月で破ったとはいえ、直ちに禁酒会員の行動に悖るかは判断が難しい。住友忠隈禁酒会のように、「甲種会員は、一切の飲酒を厳禁し、乙種会員は外部との交渉の場合に飲む程度で自律的に節酒する」という事例もあるからである。<sup>33)</sup> 肝心の日鉄二瀬の場合はよく判らないものの、絶対禁酒は義務ではなかった可能性もある。しかも、作兵衛の場合、禁酒会員になる前年は最低でも月に一三回は飲酒し、二八回に及ぶ月もあった。その頻度が激減したことは、禁酒会参加の大きな効用かもしれない。

もつとも、作兵衛が禁酒会の会合や行事参加に頻繁に関わったのはせいぜい一九三五年までだった。日曜日に開催される禁酒会の例会に参加したのは、三六年は三月一五日だけである。四月四日は「禁酒新聞くばる 明日総会ある由」と書くも、翌日は「採休出勤」のためかその総会に参加した形跡はない。一二月二〇日も、一六日には「禁酒会の次日曜日出席を報告にゆく」とあったのに、当日は「禁酒会集會 更正館であれ共我は休めず不参」とある。二四日は「(禁酒日記) カレンダーも来」と、会の参加は滞りがちな中、配布物だけは空しく届く様が窺える。ちなみに、一一月三〇日は「よい、白井で 二合かくち」と書いた日は「(西となり島淵五郎氏は姪の浜の愛宕様に禁酒きがんの由)」と他人事のような書き方をした。三十七年は五月三〇日(は「採休出 中央で禁酒会総会ある 残業七時まで」とあり、総会があることを知りつつ休日出勤で参加できなかったらしい。結局、三十七年も「禁酒会幹部会ありし」と

ある五月二三日に参加の形跡がある程度である。三八年も同じ調子で、四月一〇日に「よい六時より会館に集合禁酒大会の（くじ）引の話合 来十七日に実行の由、会員は百八十名も せる由抽せん費世円の由」（三井炭坑は賑ふて居る）」と禁酒会の会合に一度参加したきりである。同日日記の末尾も（有）とあり、禁酒会の会合に出た日に飲酒した様子である。四月一七日は「更正会で禁酒会の例会ありて抽籤ありし由」とあるが出席した形跡はない。三六年から三八年は作兵衛と禁酒会との縁が完全に切れたわけではないものの、甚だ疎遠で、三九年は禁酒会の会合に参加した形跡はない。

禁酒会と距離を置く一方、一九三七年から翌三八年にかけて一時期ながら、作兵衛は生長の家とその会合に関心を示した様子が窺える。谷口雅春を創始者とした新宗教、生長の家は、日中戦争期は労働者教育にも進出していた。日鉄二瀬炭鉱役員の松隈競は無料の機関新聞『光明の音信』を所望し、中央坑に一〇〇部、高雄二坑に五〇部、潤野坑に五〇部、稲築坑に二〇〇部取り寄せたらしい。稲築坑長の小倉進は「同坑従業員七百名に全部聖典（註『生命の実相』のこと）を読ませたき意向にて、先づ手始めとして『光明の音信』を時々全家庭に配布したき希望」を生長の家に寄せるなど特に執心していた様子である。

作兵衛日記の一九三七年の週末余日の一月一九日の記述に「小浅（小倉の誤りか）坑長の生長の家の話し」とあり、同二二日は「生命の教育雑誌を送り来る 十二月号」とある。三八年四月一八日は「会館で（生長の家）座談会あり 松河先生の来破 五十名あまり」と、生長の家主催の座談会に出席した様子が窺える。炭鉱禁酒会が多くを会員を獲得できたコミュニティは、メディアと講話会を布教の軸とした新宗教が信者

を獲得しやすい空間でもあったのだろう。続けて「去る（八日）に坑長の申されし（伸びる力）の雑誌を注文する。外に四 五名もする 一冊五十銭もするので余り欲しくもないがやむを得む読物が多いので好まない本）しかし、読んで為になる事多いと思ふ」と書いた。作兵衛がどこを「為になる」と感じたかは分からないものの、作兵衛が読んだであろう谷口雅春『伸びる力』（光明思想普及会、一九三八年、五〇銭）などにある生長の家の教義には禁酒、禁煙が含まれていたことは意識してよい。ただし、生長の家との関係も長続した様子はない。

一九三八年七月から作兵衛の飲酒量は増え、三三年よりも激しくなった。三八年一〇月三日には「本日より当分禁酒再起」と書くも、収まる気配はなかった。同年一二月七日も「禁酒カレンダー註文」、禁酒始め残業一日毎になりしたため」とあり、一二月三十一日は「禁酒行進曲」の歌詞を五番まで記したものの、飲酒の頻度は減っていない。三九年は飲酒回数が落ち込む月もあるものの、例えば一月は虫下しを頻繁に飲むなどしており体調などが影響した可能性が大で、禁酒を志したわけではなさそうである。なお、作兵衛はこれらの飲酒行動について家内から干渉された様子は特に見られない。

作兵衛のように模範的とは言いがたい、あるいは、それよりひどい禁酒会員は相当数いたのだろう。一九四〇年一二月の『禁酒新聞』の記事にはこうある。

昨秋更生するまでの日鉄二瀬禁酒聯盟潤野坑禁酒会は衰運の一路を辿り遂には全く自滅の状態に陥ち入つて従業員日常生活上にも飲酒に依る弊害が頻発する有様となりました。此の現状を憂へ、労務係長濱和平と現会長黒永虎之助氏は昨秋十月相計り、残留会員二十

余名を以て改組新発足をなし、潤野坑禁酒会第一回総会を開催し能率増進と災害防止は禁止〔禁酒の誤りか〕から!!のスローガンを掲げて捲土重来したのである。以来今日迄必死になつて会員の獲得につとめ新生活の教育指導に懸命の努力を注いだところ、効果メキ／＼顕れ今日では会員二百七十余名に達し〔以下略〕<sup>28)</sup>

潤野坑禁酒会が一九三九年一〇月頃から更生したという趣旨の記事ながらも、注目すべきは会員数の極端な推移である。発足時には潤野坑禁酒会の会員数は、古株の高雄二坑禁酒会に次いで多い、一一六名とされた。しかし、衰運時には会員らしい人間は二〇人のみで、熱心な労務係長と会長の挺入りで二七〇名まで急増したという。これなど禁酒メディアの熱心な宣伝の裏で、会員の離反や交代が繰り返されたこと、禁酒会という組織の移ろいやすさを示す好例である。作兵衛も炭鉱禁酒会内の不安定分子の一人だったということだろう。

### 三、日鉄二瀬禁酒聯盟の戦時

この盛んなる禁酒会も第二次大戦開始と共に自然壊滅の形となった。いわずもがな酒はのむにものめない。戦時中の苦難、上戸も下戸も空腹を凌ぐのに悲鳴をあげる状態。酒どころの騒でなく、たまにあ配給酒が備てあった。酒ばかりでなくすべての食糧に悩んだ事はここに改めてかく必要もない。

冒頭でも紹介した山本作兵衛ノートには、右のように炭坑禁酒会が第二次大戦の開始とともに「自然壊滅」したとある。しかし、この見方は、作兵衛が一九三四年の入会から二年程度で禁酒会活動に消極的になり関

心を失っていったことの反映に過ぎないのではないか。『禁酒新聞』や『禁酒之日本』の内容を見れば、炭鉱禁酒会の活動は戦争中こそ盛んになったと見るべきである。事実、日鉄二瀬禁酒聯盟は筑豊で三井田川、住友忠隈とともに炭鉱禁酒会の中で存在感を発揮し続け、戦争中は時局迎撃的な活動に積極的に参加していく。

福岡の炭鉱禁酒会では珍しいことに、日鉄二瀬禁酒会の総会は『禁酒新聞』などで報じられ、しかも県内だけでなく、日本国民禁酒同盟の理事が来訪した。一九三八年三月二〇日の第五回は井上一次理事（陸軍中将）、一九三九年五月二八日の第六回は大平得三理事（九州帝大医学部長）、四〇年六月二日の第七回、四一年五月四日の第八回、四二年五月一〇日の第九回は総主事の小塩完次といったかたちである。<sup>29)</sup>

総会はほぼ毎回「宣言」、「決議」を出した。文言は似通っている。ここでは、「銃後生活刷新」「戦時禁酒断行」「国家総力發揮」を掲げた、三九年の第六回総会の「決議」文を引用する。

一、吾等は時局の重大性を正しく認識し銃後産業人の自覚を以て益々禁酒を強調し長期戦に備ふる所あらんことを期す  
一、吾等は禁酒精神の普及を以つて、体位の向上を図り、災害の防止に努め以て産業能率を 増進し、鉱業報国の実を挙げんことを期す  
一、吾等は二瀬産業所の中堅となるべき意気と責任を衿治し益々精進して明朗二瀬建設に寄与せんことを期す

「昭和十二年度加盟団体報国」によれば、日鉄二瀬禁酒聯盟は「会勢拡張」、「廿五歳法請願」に努めたほか、「出征軍人家族慰安のため、映画会、素人演技大会等を催す」とある。<sup>30)</sup>炭鉱禁酒会が銃後団体としての性格を帯びていったことの表れと言える。

また一九三九年五月二八日の第六回総会での大平の講演は「豊かな医学的酒害論と新東亜建設下の人的資源確保を力説」したとある。<sup>41</sup>第七回総会では小塩が四〇年三月成立の国民優生法に言及し「悪い遺伝性の欠陥は殆んどすべて酒毒に依る」、優生学上、「酒毒」は「長じては犯罪の原因」になると述べた。また、「東亜新秩序の建設」のための大陸進出に際し「酔ふ事を恥として酒に慎み深い支那人には、飲酒酩酊を誇らかにしてゐる日本人の態度にはどうしても尊敬の念が起らないと云つてゐる」とある。禁酒の普及は優生学とも結びついた「体位の向上」と「東亜新秩序の建設」に不可欠な点を、演者の両人は強調した。

さらに、小塩は「日立鉾山の禁酒以前に於ける災害状況は、一千名に付三百七十七名であつたのが、禁酒運動が徹底して昨年は一千名に付き僅かに四十二名と激減」したことから、「禁酒こそ災害を防止し作業能率を増進する」と述べた。<sup>42</sup>炭鉱で禁酒運動は、安全運動、能率向上上は意義を強調し続けたが、戦時は「鉾業報国」というかたちで一層高調された。

一九四一年五月の第八回総会では組織上、重大な決定が成された。「労務主任が禁酒会長」になるというものだった。「これまで各坑の会長及び幹部は熱心な運動者であつたが、今年よりは方針を一変して各坑の労務主任が会長となり、従来の会長は副会長となつた。『禁酒新聞』は「これは会社当局が、それだけ禁酒運動に積極的に乗出したことを意味し、会長には大学出の労務主任を任じ非常な画期を帯びてゐる」と評した。<sup>43</sup>

同時期の労務管理と禁酒運動の結合の加速を示すものに、一九四〇年一二月開所の「栄養食配給所」がある。「最新式の設備を施した頗る衛生的な明るい感じの食堂」だった。「朝十二銭昼十五銭、夕十六銭の三食の外に二番方で坑内に行くものには、弁当も付き、それに幾らでも食べ放

題、今のところ三千五六百食出」すも「一万食分」は出せる能力を有したという。さらに、「五坑に向けての栄養食の配給と弁当の仕出」もし、四年五月段階では「隣接地には冷凍工場を新設中」だった。同所は第八回総会晩餐会の会場で、来賓の佐藤忠市（三井田川禁酒会長）は「これこそ絶好の晩酌封じ」と讃嘆した。これを紹介した『禁酒新聞』は「酒をやめて乳を飲め」の牧場経営と俟ち、禁酒運動と表裏一体となつて、栄養の改善、家庭生活の明朗化をねらふ大森課長の無酒理想郷建設の力強いステツプ」と評した。<sup>44</sup>「栄養食配給所」は三〇年代の好況局面を背景に日中戦争期に一層盛んになった福利厚生拡充の一環と見なせる。<sup>45</sup>日鉄二瀬禁酒聯盟の主導者、大森辰二が労務課長として同施設の建設と運営を担い、そこに坑内禁酒の意義も持たせた点に禁酒運動が労務管理の構成要素としての重要性を増した様子を看取できる。

こうした戦時期における炭鉱禁酒会の存在感の増大、それに基づく社の労務管理との結びつき、日鉄二瀬禁酒聯盟と日本国民禁酒同盟本部との結びつきの強化を背景に、一九四〇年代は、日鉄二瀬が舞台として目立った二つの大きな行事が実施された。

一つ目は、一九四二年六月七、八日に福岡鉾山監督局、福岡地方鉾山部会の共同主催で実施された、第一回鉾業報国禁酒講習会である。日鉄二瀬鉾業所会館（嘉穂郡穂波村）で開催された。『禁酒新聞』は、「鉾山監督局、鉾山部会がみづから主催者となつて禁酒講習会を開いたといふことは我国の鉾業史上に於ける最初の歴史的快挙で、当局側及び一般産業人の非常な注目を惹いた」と紹介した。受講の資格者は「各鉾業報国会における幹部にして各会員指導的地位にある三名程度であり、日鉄二瀬、三井田川、三菱筑豊、住友忠隈、古川大峰、貝島大之浦をはじめ四



八鉱業所の技術者、労務者、事務係員を網羅するものだった。講師は日本国民禁酒同盟から派遣され、諸岡存（禁酒同盟理事、医学博士）『アルコールの脳に及ぼす影響』『酒精中毒とその救治』、小塩完次（常務理事）『大東亜戦争と禁酒問題』『禁酒運動の諸方法』という内容だった。加えて、研究協議、懇談、親睦、映画幻灯の映写等が成されたのだった。<sup>47</sup>なお、第二回講習会も諸岡、小塩を講師として一〇月一二、一三日に開催され、会場は三井田川鉱業所松原講堂だった。<sup>48</sup>

二つ目は、一九四三年四月一〇日から一二日に開催された、第二四回日本国民禁酒同盟全国大会である。飯塚市を中心に日鉄二瀬、住友忠隈、三井田川の各炭砒にわたる移動式会場という形をとった。地元準備委員長は、日鉄二瀬禁酒聯盟理事長になっていた大森辰二だった。大森は「幸ひ地元には、幾つもの工場、鉱山、其他に有力な禁酒会もあることだし、其の協力と度名本部の積極的な御指導御鞭撻、並に全国各地の熱心なる同志諸賢の御援助を得るならば、必ずや時局下有意義なる大会を持つことが出来ることを確信する」などのコメントを出した。<sup>49</sup>『禁酒新聞』は各炭砒の移動式にする方針の趣旨をこう説明した。

主題標語の「決戦力増強」が物語つてゐる通り今次大会の目ざすところは、生産戦力の根本たる石炭増産に日夜敢闘をつゞけてゐるツルハシ戦士とその家族とを現地に慰問して満腔の国民的感謝、激励を贈ると、もに、〇〇万会員の模範となり推進力となつて世界にも比類のない見事な増産成績を確保してゐる禁酒炭砒の實際を職場に寮舎にまた社宅に訪れてチカに視察、見学して決戦力増強にマザーク偉勲を立てつ、ある禁酒運動の国家的重要性を闡明し、これを弥が上にも拡大宣揚して其の影響力を全国あらゆる重点産業の職場と其

の背後とに普及せしめんとするにある。<sup>50</sup>三井田川や日鉄二瀬などの炭砒禁酒会の活動を「決戦力増強」と結び付け、「ツルハシ戦士」としての彼らを慰問するという趣旨から、一九四三年の日本国民禁酒同盟全国大会は、日鉄二瀬、住友忠隈、三井田川などの移動式会場になったことが窺える。

大会は四月一〇日から一二日にかけて、飯塚市を中心に、住友忠隈鉱業所体育館その他を会場として挙行された。「折柄の警戒警報発令に予定遂行の困難は増強したが、敢闘の精神は一段と燃え上がり、あらゆる諸具合を克服して馳せ参ずる同志の面々は北海道より朝鮮の各地にわたる猛者ぞろひ」と『禁酒新聞』はその様子を伝えた。四月一日第二日大会開会式では「三井田川、日鉄二瀬等の婦人部隊をはじめ各坑の青年隊、少年少女隊の集団入場も相次ぎ、定刻前早くも会場は階上階下二千の会衆で一ぱい」になったという。一九三四年に福岡市で第一五回全国大会を実施した際の動員人数は過去最多の約二八〇〇人とされるため、「二千の会衆」はそれに次ぐ動員人数だったと言える。『禁酒新聞』は「鉱山禁酒の実績を現地に踏査して「働く者に酒無用」禁酒こそ生産力拡充、戦力増強の不可欠条件なることを戦ふ日本の朝野に弘布徹底せしめんとする本大会の特殊使命は十二分に達せられ」たとその模様を評した。<sup>51</sup>同大会の「決議」では、「酒造全廃断行」「戦力増強は禁酒から」「戦争生活の實踐による二百七十億貯蓄達成」、「人口国策に酒害防除を採入れ健民強兵の徹底期せ」「青年禁酒法制定即時貫徹」などの文言が並んだ。<sup>52</sup>

大会三日目の四月一二日、キリスト教婦人矯風会会長でもあった林歌子を班長とする慰問班第一班が、日鉄二瀬鉱業所を訪れた。林は一九四三年で八〇歳を迎える齢だった。佐藤松之丞所長は「かゝる高齢者の入

坑は空前のことです」と喜び、所長の案内で一行は坑内を視察し、その際、林は坑内で演説した。「私は鉱山に禁酒会員が、だんだんふえて見事な増産の成績をあげてゐる有様を見て嬉しくなりません。ご安全に！まったく酒さへやめれば家内円満で心にかゝることもありません」、石炭増産が「天皇陛下に対し奉り何よりの忠義」で「米英撃滅」につながるなどと述べた。<sup>53</sup>禁酒による家庭円満こそが産業報国の要件とする安全運動のイデオロギーが繰り返され、「米英撃滅」にまで敷衍されたのだった。

一九四五年一月の『禁酒新聞』は、神風特別攻撃隊葉桜隊員の山下憲行海軍少尉が「レイテ湾の華」と散ったことを報じた。山下の父、寅吉は、日鉄二瀬鉱業所勤務に務め、高雄二坑在勤中から禁酒会員だった。『禁酒新聞』は寅吉を「金鶏の父」と称え、山下少尉も「禁は家訓であり、かて、加へて予科練の厳格な禁酒主義で叩きあげられ」たことなどを伝えた。そして日鉄二瀬鉱業所は「佐藤所長以下全山火の玉となり『神鷲山下君につゞけ』と無欠勤を申合せ決戦増炭の大運動に邁進」し、「これに呼応した日鉄二瀬禁酒聯盟では青少年部や婦人部を動員して全山無酒化」を期していると報じた。<sup>54</sup>炭鉱禁酒会は、山本作兵衛ノートの記述とは正反対に、敗戦間際まで炭鉱無酒化や石炭増産を高調し続けたのである。

## おわりに

本稿は、日本国民禁酒同盟の関係史料を利用して日鉄二瀬禁酒聯盟の動向を明らかにし、一方で、山本作兵衛ノートや日記に依拠して聯盟内の稲築坑禁酒会の動向を補い、同時に模範的な会員だったと言ひ難い作兵衛の禁酒と飲酒の動向も扱った。やはり両者の動向を照合することで、

我々はより深く炭鉱禁酒会の性格を理解できることは明白だろう。

福岡県内の炭坑禁酒会の動向を踏まえた、日鉄二瀬禁酒聯盟の性格はこう説明できる。ビラ、ポスター、酒なし日、安全運動への取り組みなど、他の炭坑禁酒会と同様の活動を行っていた一方、三井田川に次ぐ規模と古さを誇っていた。日鉄二瀬外との禁酒会や禁酒主義者との交流も他所より目立ち、『禁酒新聞』や『禁酒之日本』などへの登場も多く、日本国民禁酒同盟とのつながりも深かったと見られる。さらに、労務課主体の性格も顕著で、青少年の禁酒運動への取り込みも前身団体との関連から積極的だった。

一方、作兵衛日記は日本国民禁酒同盟のメディアが報じなかった稲築坑禁酒会の詳細まで示してくれる。それ以上に、作兵衛のように、絶対禁酒は二ヶ月で放棄し、節酒はするも時として深酒に及び、二年ほどで会の活動から遠ざかる人物まで禁酒会が包摂していたことは大いに留意すべきである。禁酒同盟の媒体からは、派手な禁酒宣伝や会員数増加ばかりが喧伝される。しかし、個々の禁酒会員は酒の誘惑に浸潤され続けただろうし、組織も時間と共に構成員の入れ替わりを繰り返すなど、流動的性格が濃厚だったと推察される。

もともと、第二次大戦と同時に炭坑禁酒会が自然消滅したという作兵衛の認識は、実態とは異なることは、日本国民禁酒同盟の関係史料から明らかだろう。日鉄二瀬禁酒聯盟は筑豊で三井田川、住友忠隈とともに炭鉱禁酒会の中では相当の存在感を發揮し続け、戦争中は時局迎合的な活動に積極的に参加し、戦時中こそさらに酒害撲滅と禁酒報国に邁進したし、行政とのつながりも深まったのだった。

ただし、第二次大戦後には諸々の炭鉱禁酒会は確かに作兵衛が述べた

とおり、自然消滅したと思われる。詳細は別稿で論じたいが、労使協調的性格が強く労務課との結びつきが強かった炭鉱禁酒会は戦後の労働組合の台頭で急速に勢力を喪失していったことが原因の一つかもしれない。同時に本稿の内容を踏まえれば、炭鉱禁酒会内部には作兵衛のように会に属しても節酒に留まり、短期間で会から離れるような人々も相当いた可能性もある。禁酒運動は「無酒国」を理想とする国家政策化を目指し、炭鉱禁酒会の動員数は他所に比して著しいものがあつた。しかし、その炭鉱禁酒会は会員内の飲酒の管理すら成功したとは言えないことは、作兵衛の事例から多分に明白である。そうした中、運動に積極的な団体や人物が欠落すれば、飲酒の風習が根強い炭鉱社会内の禁酒運動など容易に瓦解しえたのかもしれない。労働力の健全化、安定した貯蓄、家庭の平和など禁酒運動が掲げたメリットは筑豊の炭鉱社会でも多分に魅力的ではあつただろう。しかしながら、大方の人々が生得的に感じる酒の誘惑はやはり躓きの石だったのでないか。

## 注

- (1) 森本弘之「解説 山本作兵衛の炭坑画と文」(山本作兵衛『筑豊炭鉱絵物語』岩波書店、二〇一三年)、三六一頁。
- (2) 「ガンーと頭に来た百分の禁酒大行進 大旗小旗を翳して 福岡市内を大宣伝」『福岡日日新聞』一八一五五号、一九三四年四月九日、三面、「全国代表者集り禁酒の大宣伝 けふ東公園武徳殿で」『福岡日日新聞』(夕刊) 一八一五五号、一九三四年四月九日、二面、「三日間に亘る禁酒大会大成功に終る」『福岡日日新聞』一八一五六号、一九三四年四月一〇日、三面、「あす福岡で全国禁酒大会 長尾・安部氏等の大物参集 大会後呼び物の大デ

モ」『九州日報』(夕刊) 一五六四六号、一九三四年四月八日、一面、「春の街頭行進に『酒の悪』を高調 禁酒同盟大会第二日 けふ盛んに行事を進む」『九州日報』一五六四七号、一九三四年四月九日、二面、「本社ホールでけふ時局講演会 日本国民禁酒同盟大会 けふ第三日の行事」『九州日報』一五六四七号、一九三四年四月九日、七面、「三優良団体を表彰 禁酒同盟大会第三日」『九州日報』一五六四八号、一九三四年四月一〇日、二面。「酒の悪を強調 昨夜公会堂、本社ホールで 禁酒同盟講演会」『九州日報』一五六四八号、一九三四年四月一〇日、五面。

- (3) 「左り党唸る！禁酒大会の後を追ひ今度はナンと『酒祭り』」『九州日報』一五六四九号、一九三四年四月一日、二面。以下、原則として引用史料の旧字体は新字体に、カタカナはひらがなに、英数字は漢数字に置換する。また史料内の(一)は筆者による注記である。

- (4) 下田光造「精神衛生講座 アルコホール中毒に就いて(一)」『福岡日日新聞』二〇三〇四号、一九四〇年四月二〇日、四面。

- (5) 未成年者飲酒禁止法と改正運動を論じたものに、元森絵里子「語られない「子ども」の近代——年少者保護制度の歴史社会学」勁草書房、二〇一四年、青木隆浩「近代日本の禁酒運動と禁酒法案からみた儀礼の中の酒」『国立歴史民俗博物館研究報告』二〇五集、二〇一七年、同法成立の立役者根本正に特化したものに、石附実「公教育と未成年者禁酒・禁煙法——衆議院議員根本正の議員活動から」(本山幸彦「帝国議会と教育政策」思文閣、一九八一年)、加藤純二「根本正伝——未成年者飲酒禁止法を作った人」銀河書房、一九九五年、根本正顕彰会編纂委員会「不屈の政治家根本正伝」根本正顕彰会、二〇〇八年。

- (6) 宮田昭「炭坑の絵師 山本作兵衛」書肆侃侃房、二〇一六年、一八九頁。

- (7) 断片的ながら炭鉱禁酒会に言及した研究もある。田中直樹「山本作兵衛 作品と筑豊地域社会」(有馬学ら編著『山本作兵衛と日本の近代』弦書房、

二〇一四年)は、三井三池炭鉱の福利厚生制度の一環に禁酒会を挙げている(一〇二頁)。野依智子『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族』(明石書店、二〇一〇年)は、三池宮浦坑社宅行事の一環の禁酒会講演、禁酒会発会式(一八六頁)、三井田川鉱業所での炭坑主婦会と禁酒会による赤ん坊審査会(一八九頁)、三池四山坑での安全週間記念の禁酒日(二三三頁)などを紹介している。

(8) 日本の禁酒運動を概観的に論じたものに、田中和男「酒と健康——どうして酒はやめるべきか」(『キリスト教社会問題研究』三七号、一九八九年)、高田公理「禁酒文化・考」(石毛直道編『論集酒と飲酒の文化』平凡社、一九八八年)、二宮一枝「近代日本における禁酒運動のパラダイム」(岡山県立大学保健福祉学部紀要)一四卷一号、二〇〇七年。本稿が対称とする大正期から終戦期までを対象とした研究に、葛西健太「救世軍の山室軍平と禁酒運動——自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」(駒澤大学心理学論集)一〇号、二〇〇八年)、元村智明「禁酒村と愛育村の取り組みに関する一考察」(杉山博昭編『戦前期における社会事業の展開——自由と全体性の変遷をめぐって』社会福祉形成研究会、二〇一五年)、小関恒雄「長野県諏訪地方の禁酒運動——松浦有志太郎の係りを中心に」(『医譚』九八号、二〇一三年)、「昭和初年頃我国の禁酒事情」(『医譚』一〇一号、二〇一五年)。日本国民禁酒同盟の後続組織、日本禁酒同盟の同盟史関係の著作に、小塩完次『日本禁酒運動の八十年——東京禁酒会一八九〇——一九七〇』(日本禁酒同盟、一九七〇年)、『写真と日記で綴る小塩完次・とよ子の禁酒運動——世界連邦運動の歩み』(日本禁酒同盟資料館、二〇一一年)などがある。

(9) 別稿「福岡県内の炭坑禁酒会——三井田川禁酒会を中心に」を用意している。また関連する拙稿に、「Eugenics seen from the Temperance Movement in Prewar Japan: Focused on the movement of the National Temperance League

of Japan” (Historia Scientiarum 誌に掲載予定)がある。

(10) 『全国禁酒団体名簿』日本国民禁酒同盟、一九二八年(日本禁酒同盟資料館史料)、五五頁。

(11) 「講演会と行進に 青年団や修養団も参加」『禁酒之日本』一〇七号、五〇頁。

(12) 「酒屋も進んで休業——二瀬鉱業所の酒なし日」『禁酒之日本』一一九号、一九二九年一〇月、三六頁。

(13) 「二瀬禁酒同盟会(福岡県嘉穂郡穂波村製鉄所二瀬出張所)」『禁酒之日本』一一六号、一九二九年七月、五四頁。

(14) 前掲「酒屋も進んで休業——二瀬鉱業所の酒なし日」、三六・三七頁。

(15) 「新団体名」『禁酒之日本』一一一号、一九二九年一二月、四九頁。

(16) 「禁酒戦線 二瀬禁酒同盟」『禁酒之日本』一三〇号、一九三〇年九月、六一頁。

(17) 「自転車隊で炭坑猛襲——三井田川の壮挙——二瀬と共同戦線を張つて」『禁酒新聞』一〇一号、一九三二年六月、四面。

(18) 「筑豊の炭坑の猛者勢揃ひ」(『禁酒新聞』一九三五年六月一日、三面)によれば、一九三五年四月二日も、日鉄二瀬、三井田川、住友忠隈の自転車隊二〇〇名が「自転車進行のデモをやり幸袋川原では大円陣を作つて野外大会に氣勢をあげた」とある。

(19) 「第十二回酒なし日報告 日鉄・二瀬 ウチワ太鼓に全山うごく」『禁酒之日本』一九一号、一九三五年一〇月、二三頁。

(20) 「陣容愈々堅し記念に会員倍加運動——日鉄二瀬禁酒聯盟」『禁酒之日本』二〇三号、一九三六年一〇月、三〇一頁。なお同記事は、高雄二坑禁酒会の会長だった入江俊吉郎が中央坑に移動したこと、高雄一坑禁酒会長の中島哲輔が就業中に負傷し死去したことも伝えている(三一頁)。

(21) 大森隆二「双手をあげて万歳を……」『禁酒之日本』一九六号、一九三六年

三月、三四頁。

(22) 「災害半減し賃金著しく増加 三井田川炭坑の成績物を言ひ 安全週間に禁酒採用」『禁酒新聞』一四二号、一九三五年一月、三頁。

(23) 前掲、大森辰二「双手をあげて万歳を…」、三四頁。

(24) 「炭鉱婦人の活動」『禁酒之日本』一八九号、一九三五年八月、三三頁。炭坑主婦の安全運動への関与は、野依智子、前掲書(第五章)が詳しい。なお、禁酒会の婦人部の記述は散見されるものの、各坑でいつ形成されたかは明瞭でない。また大森辰二は「働かねばウソだ!!」(『禁酒之日本』一八七号)で「我等の周囲には三千名を擁する主婦会あり」と述べており(四六頁)、主婦会の活動と渾然していた可能性も高いと思われる。

(25) 「恐ろしい災害も家庭の不和から 炭坑の主婦さん曰く」『禁酒新聞』一四八号、一九三六年五月一日、四頁。

(26) 「美しい主婦の心やり 二瀬の安全座談会」『禁酒新聞』一六二号、一九三七年七月一日、四頁。

(27) 「蒙御免禁酒新聞購読部数番付」『禁酒新聞』一四二号、一九三五年一月一日、四頁。

(28) 「山本作兵衛——日記・手帖」解説資料集第一〇巻『福岡県立大学付属研究所障害福祉センター研究報告叢書』四八号、二〇一一年。一九三九年の記述のみ「山本作兵衛——日記・手帳」解説資料集 第九巻『福岡県立大学生涯福祉センター研究報告叢書』四六号、二〇一〇年)に依拠。本資料は頻出のため、出典の表記は本文中に日付等を示すことにする。なお、同資料の原本は福岡県立大学に所蔵されているも閲覧は不可能であり、史料の複写やデジタル情報なども開示されていない。ユネスコ「世界の記憶」登録遺産の一部である、同資料の情報公開の現況には大いに改善の余地がある。

(29) 「立錐の地なき武徳殿の盛観 堂々たる開会式」『禁酒新聞』一二四号、

一九三四年五月、二面。

(30) 「全国大会の歴史 通算すれば四十二回」『禁酒之日本』二四八号、一九四〇年七月、三八頁。

(31) 井上精三『博多郷土史事典』葦書房、一九八七年、二一六―二一七、二四〇頁。なお同書をはじめ、複数の福岡郷土史関係の著作は、箱崎水族館以来二十六年 箱崎水族館身売り 愈よけふ限りへ移管して小倉到津動物園へ(『福岡日日新聞』一八五二九号、一九三五年四月二日、三面)から、箱崎水族館は三五年四月二日まで存続したと見るべきだろう。

(32) 先述の通り、作兵衛は飲酒した日は「有」、酒を飲まなかった日は「ム」などの印をつけることが多い。これらの印がない場合も飲酒した日はその旨を日記に記した。故に、作兵衛日記の飲酒記録は他の日記よりはるかに精確だろう。それでも、飲酒した日を記録していない可能性もゼロではない。同表は日記から追える内容を記したものに過ぎない。

(33) 福永年久「石炭とともに」『東洋書館』一九五七年、一二六頁。戦後に井華鉱業(のち住友石炭鉱業)社長、会長となった福永は一九二〇年から三六年まで住友忠隈炭鉱に勤務し、住友忠隈禁酒会にも参加した。関連して、「三井田川炭坑の一角に禁酒の運動起る」絶対的ではないのですが……と佐藤主任と記者の一问一答(『門司新報』一三八一七号、一九三三年二月二二日、五面)で、「冠、婚、葬、祭に必ず酒を用ふる神代からの先天的習性」が話題になった際、佐藤忠市が「勿論全然酒を用ひぬと謂ふのではありませぬが…」と述べたところ、記者から「では節酒運動ではありませんか」と言われた一幕がある。最大規模の三井田川禁酒会ですら誰もが絶対禁酒を実践していたわけではないことが窺える。

(34) 作兵衛日記の一九三八年五月二二日は「ひるに耐一合のむ(先々日書きし禁酒実話又々訂正書直す原稿紙六枚もある しかし出す気は無以 何か

になるだらう」とある。禁酒会会合に出た日に飲酒した記述に通底し興味深い。同原稿の存在は現在確認できない。

- (35) 谷口雅春「伸びる力」光明思想普及会、一九三八年、一〇一―一頁。  
(36) 谷口雅春には『禁酒禁煙報国』（光明思想普及会、一九四〇年）という著書もある。

- (37) 山本作兵衛、藤山スエ「作兵衛絶唱」(SCABLA RECORD、一〇〇〇年) というCDには、この歌も収録されている(筑豊文庫で一九六八年に収録)。

- (38) 「禁酒炭坑を語る 休日献げて出炭報国に邁進 酒やめて一家第幸福」『禁酒新聞』二〇二号、一九四〇年一月、三面。

- (39) 「相呼応して二瀬の総会 街頭戦に意気揚る」『禁酒新聞』一七二号、一九三八年五月、三面、「日鉄二瀬の第六回総会 大平博士も応援」『禁酒新聞』一八六号、一九三九年七月、三面、「飲んだくれ炭坑が一変 酒やめて明期日鉄二瀬」『禁酒新聞』一九八号、一九四〇年七月、三面、「固し禁酒報国の誓 日鉄二瀬禁酒聯盟総会の盛況」『禁酒新聞』一九四一年六月、二

- 〇九号、二面、「団体報告 全坑禁酒の実現期して躍進 日鉄二瀬九回総会」『禁酒之日本』二七二号、一九四二年七月、二九頁。  
(40) 「輝く戦績 日鉄二瀬禁酒聯盟(福岡)」『禁酒之日本』二二六号、一九三八年九月、四一頁。

- (41) 「大平博士を迎へて鉱業報国邁進の決議 日鉄鉱業二瀬禁酒聯盟第六回総会」『禁酒之日本』二三六号、一九三九年、四五頁。  
(42) 小塩完次「鉱山の同志に檄す!! ―日鉄二瀬禁酒聯盟総会に於ける講演」『禁酒之日本』二四八号、一九四〇年七月、三七―三八頁。

- (43) 前掲、「固し禁酒報国の誓 日鉄二瀬禁酒聯盟総会の盛況」、二面。住友忠限鉱でも類似の現象が見られた。一九四二年に労務課長岡本義雄(帰還将校、軍人会長)が禁酒会長に就任し、禁酒会は「産業報国会の一部門とし、従つて経費も会費制を改めて、会社より支弁し、これによつて全山の

稼働者が会員に加入する建前に改組した」とある(『全山禁酒近き住友忠限炭坑 労務課長が禁酒会長』『禁酒新聞』二二五頁、一九四二年一〇月、三面)。

- (44) 「晩酌封じはこれに限る 二瀬名物栄養食配給所」『禁酒新聞』二〇九号、一九四一年六月一日、二面。史料内の「牧場」とは一九三四年二月設置の小正牧場のことであろう(『日鉄二瀬六十年史』日鉄工業株式会社二瀬鉱業所、一九五九年、八〇頁)。

- (45) 同時期の筑豊炭鉱の福利厚生拡充については、特に、荻野喜弘『筑豊炭鉱労使関係史』(九州大学出版会、一九九三年、四二〇―四三〇頁)を参照。  
(46) 小塩完次は日記(日本禁酒同盟資料館蔵)の一九四〇年六月二日の記述で「大森課長」を「地位は高くなつても少しも威張らない」と評した。翌

- 三日は「森(昇か)さんの案内で潤野にゆき十時から主婦会。常会をやつてゐるといふが、立派な司会ぶりだ。午後は坑内を見る」とある。小塩は日鉄二瀬禁酒聯盟や関係者に個人的にも好感を抱いていた様子が窺える。

- (47) 「当局側主催で鉱山禁酒講習会 鉱業史上画期的の壮挙」『禁酒新聞』二二三号、一九四二年八月、二面。

- (48) 「増産に禁酒 北九州に進展! 鉱山禁酒化運動 福鉱部会第二回禁酒講習会開かる」『禁酒新聞』二二六号、一九四二年一月、二面。

- (49) 大森辰二「是非来て見て頂きたい 鉱業戦士の敢闘ぶり ― 全国大会準備委員長に推されて」『禁酒新聞』二二二号、一九四三年四月、三面

- (50) 「筑豊炭田内線深く決戦勢ふ同志大結集 空前の全国大会行事決まる 期日・来る四月十日から三日間」『禁酒新聞』二二〇号、一九四三年三月一日、二面。

- (51) 「第二十四回全国大会 使命果す決戦大会総べては戦力増強へ」『禁酒新聞』二二三号、一九四三年五月、一面

- (52) 「決議」『禁酒新聞』二二三号、一九四三年五月一日、一面。  
(53) 「坑口演説 ごあんぜんに!」八十歳のおばさんからヤマの皆さんに

お願ひ、林歌子女史』『禁酒新聞』二三三号、一九四三年六月一日、一面。  
(54) 「神鷲生んだ禁酒の家 日鉄二瀬 無欠勤でつゞく」『禁酒新聞』二五二  
号、一九四五年一月一日、二面。

\*本研究は日本学術振興会特別研究員研究奨励費(1610476)、社会事業史学会  
第六回吉田久一研究奨励賞研究助成の成果である。